

能 源氏供養

安居院法印 大日方寛

采女 桑田 貴志

從僧 御厨 誠吾
從僧 渡部 葵

後見 墨 敬子
津村 禮次郎

地謡 石井 寛人 坂 真太郎
奥川 恒成 奥川 恒治
新井 麻衣子 観世 喜正
中森 健之介 永 島 充

〔休憩十五分〕

狂言 胸 突

借手 山本 則孝

貸手 山本 則秀

和布刈 坂 真太郎

仕舞 景 清

籠太鼓 観世 喜正

津村 禮次郎

地謡 石井 寛人 坂 真太郎
佐久間 二郎 永 島 充
筒井 陽子

〔休憩十五分〕

能 葛 城

里女 鈴木 啓吾

山伏 野口 能弘

山伏 吉田 祐一
山伏 小林 克都

里人 山本 則重

大鼓 亀井 広忠 太鼓 林 雄一郎
小鼓 田邊 恭資 笛 松田 弘之

後見 奥川 恒成
奥川 恒治

地謡 金子 仁智翔 坂 真太郎
筒井 陽子 中森 貫太
新井 麻衣子 中所 宜夫
中森 健之介 佐久間 二郎

〔終演予定 四時三十分〕

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場内によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

能…源氏供養(げんしきょう)

中世において和歌は至上のものとして、物語は人々を惑わす狂言綺語とされた。「源氏物語」は熱狂する人々がいる一方で、作者も読者も地獄に落ちるとされ、供養の時は「源氏物語表白」が唱えられた。安居院の正覚によつて著され表白文は、源氏の巻の名を桐壺から夢浮橋まで順に折り込んで、和文で仏の教えをたくみに説いている。その表白文を曲舞につくり、舞を舞うのが本曲の主眼となる。

安居居の法院(ワキ)が石山寺に参ると、女(前シテ)が名指して呼び止める。「石山寺で源氏物語六十帖を書き記したが、源氏の供養をしなかつたので成仏出来ずにいます。」と、石山の供養を頼む。不審に思いながら法院が名を尋ねると、「供養を始めたらまた現れて緒に引います。」と言うので、さては紫式部その人と知れて、女は姿を消す。

法院が石山寺で供養をしていると紫式部(後シテ)が現れる。二人はお互いに機縁を喜びつつ、光源氏の弔いをする。式部が供養の御札に布施をなそうとすると、法印は舞を所望して、式部は舞を舞う。紫の衣の袖を返しつつ、夢と現が交錯する。「そもそも桐壺の」と始まり、巻の名前を順に折り込みながら最後は、「夢の浮橋をうち渡り、身の来迎を願うべし」と鐘が打たれて回向が終る。浄土への道が開かれたことを喜びと同時に、世の無常が胸に迫り、源氏物語も石山観世音の導きであつたと思ひ至り、全ては幻想なのだと思つてこの曲は終わる。

狂言…胸突(むなつき)

借金の取り立てのお話というところ、現代では笑い話にはなりにくい。しかし、借り手が貸し手にひと泡吹かせるとなれば、中世ならずとも共感できる。胸を突かれて痛がるだけで、同情を引き出してついに証文まで手に入れてしまう手練手管。

仕舞…和布刈(めかり)

長門の国早瀬明神では、大晦日の夜に和布刈神事が執り行われる。龍神が現れると、海水を退けて海底まで露わにし、その間に神主は海底の若布を取り帰

る。再び満ち来たつた潮に乗つて、龍神は龍宮に帰つて行く。

仕舞…景清(かげきよ)

屋島の合戦で三保谷四郎と鏝引きの力比べをして名を馳せた悪七兵衛景清は、日向に流罪となり、視力を失つて乞食同然に暮らしている。鎌倉より遠路訪ねた娘に、その昔語りを仕方断で語り聞かせる。

仕舞…籠太鼓(かづらき)

人を殺して罪を得ながら脱獄した夫の身代わりとなる。籠に入った妻は夫を想ううちに物狂いとなる。牢番が時を知るために掛けた太鼓を時を刻みながら打つ。暮六つ、宵五つ、夜四つ、真夜九つと打ち進め、恋しい夫の面影を見て、身代わりこそが夫婦の証しと、籠を離れようと思ふ。

能…葛城(かづらき)

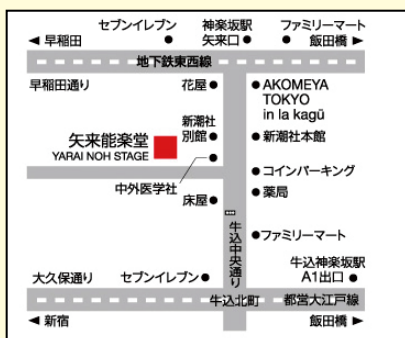
出羽国羽黒山の山伏(ワキ)とワキツレが、修験道の聖地である大和の葛城と大峰に参ろうとして、葛城山に至る。折節大雪に見舞われ、木蔭に休んでいると、土地の女(前シテ)が現れて山中の庵へと案内する。夜寒をしのごうと、手にした小枝の束を見せ、「このシモトを解いて火を焚きましよう」と女が言うので、シモトについて尋ねると、女は、古くから伝承される大和舞の「細枝結う葛城山に降る雪は問なく時なく思ほゆるかな」という歌を引いて説き聞かせる。そうして焚いた火によつて鈴懸が乾いたのを喜び、山伏は夜の勤行を始めようとする。女が自身の苦しみを申して欲しいと、三熱の苦しみを訴えると、山伏は三熱に苦しむのは神であるはずと不審を向ける。女は昔、役行者に命じられて大峰と葛城の間に岩橋を掛けようとしたが、出来なかつたために不動明王に縛められて、今まで苦しみ続けていると答える。女は行者に弔いを頼んで姿を消す。

女とともに庵室も消えて行者は木蔭に佇んでいた。やつてきた土地の者(間狂言)は、雪に降り籠められた態の山伏に声をかけ、役行者と葛城明神との経緯を語る。なお一心に仏を礼拝する山伏の前に、岩戸が開いて葛城明神(後シテ)が現れる。神の身ながら仏の世界に入ろうとして弔いを頼み、神楽歌に合わせて大和舞(序之舞)を舞う。冴え冴えと舞を舞い、夜明けが近づくと再び岩戸の中へと姿を消した。

2024. 12.14(土)PM1:00(正午開場) 矢来能楽堂

〒162-0805 新宿区矢来町 60 ☎ 03-3268-7311

地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩 2 分
都営大江戸線牛込神楽坂駅 A1 出口より徒歩 5 分
駐車場はございません。
近隣のコイン駐車場をご利用下さい。



入場料 (全自由席)

会員券 (年4回) 一般 20,000 円 学生 10,000 円
1 回券 (当日券) 一般 6,000 円 学生 3,000 円

申込先: 各出演能楽師または緑泉会まで

桑田 貴志 TEL&FAX 03-3643-0891
鈴木 啓吾 TEL&FAX 03-3269-7018

令和7年 第1回例会 2月1日(土)

能…采女 美奈保之伝 Uneme minahonoden…… 津村 禮次郎